

留学生が40数ヶ国から来ているというのは、
他の大学と比較しても
バラエティに富んでいると思います。



留学生センター

阿波村 稔 教授

(専門分野：国際金融論、異文化経営学)



阿波村先生が国際交流活動に携わるようになったきっかけは？

銀行員時代のパリでの文化交流が原点

私は瀬戸内で生まれ育って、大学で初めて京都へ行き、勤めで初めて東京に行きました。1972年に旧東京銀行(現東京三菱銀行)に入行し、勤めて4年目のある日、突然「フランスに行け」と言われて、まず、スイス国境に近いブザンソンという町の大学へ一年間、語学研修に行くことになりました。それが縁で、以降約25年間、東京と欧州を4往復して通算12年を海外で過ごしました。

当時フランスの大学は、今の日本の留学生センターと違って、全く留学生をケアしていませんでした。だから全部自分でやらなければならなかったんですよ。当初住んでいた寮を出ることになった時、探し歩いて一軒だけあった下宿に転がり込みました。フランスの大学の先生の未亡人の奥さん宅でした。そこに10ヶ月ほどお世話になりました。毎年クリスマスカードを欠かさず交わし、渡仏のたびに家族で訪ねて行ったりして「フランスの母と呼んでくれ」と言われ、それ以来ずっと交流が続いています。

直接的にはパリで支店長をしていたとき

の日仏の経済・文化交流が、いわゆる国際交流に関心をもったきっかけですね。

新潟にきたのは全くの偶然でして、現在のポストが公募で求められていましたので応募した次第です。ただ、海、山、温泉があって自然が多様で、魚やお米など食べ物もおいしいというのはありましたね。

留学生センターはどのような活動をしているのですか？

留学生・日本人学生・地域をつなげる

活動内容は大きく2つに分けて、日本語教育部門と生活指導部門があります。留学生が快適に、トラブルができるだけ少なく過ごせるようにして、もしトラブルが起きればちゃんとケアするといった活動です。

また、留学生と日本人学生、地域の間での交流活動も行っています。去年は山古志村へ留学生と一緒に田植えに行きました。山古志村とは5、6年前から交流がありまして、村の有志の方々から1年間棚田を貸しますから田植えをしてみませんか、という提案がありました。それならということ



AWAMURA Minoru

Profile

1948年10月生まれ。
1972年京都大学経済学部卒業。
1997年5月～1999年5月株式会社東京三菱銀行為替資金部副部長。
1999年5月～2002年3月株式会社東京三菱銀行パリ支店長。
2002年4月～新潟大学教授(留学生センター)。



留学生と日本人学生、
 地域の間での交流活動も行っています。
 去年は山古志村へ留学生と一緒に
 田植えに行きました。

で、田植えをして、稲を刈って、出来たもち米をついて、かまぐらで食べるという三部作を仕立てました。それが去年の5月、9月、今年の2月のことです。

行くたびに交流会を開くのですが、村の方々の中には外国人に会うのが初めてという方もいて、留学生が日本語を話すことに驚いて感激しておられました。留学生のほうも自国の話をするために資料を用意したりして、お互いにより刺激になっていますね。

現在新潟大学には何名の留学生がいるのですか？

バラエティに富んだ留学生

約400名です。半分は中国からの留学生です。そして、韓国、マレーシア、バングラデシュなどのアジアやロシアの留学生が多いですね。日本への留学生としては馴染みの少ないイランやイラクやシリアなどの中近東からも。また、アフリカだとエジプト、セネガルをはじめ7ヶ国から来ています。40数ヶ国

から来ているというのは、他の大学と比較してもバラエティに富んでいると思います。

留学生センターの課題、展望はどのようにお考えでしょうか？

おとなしい日本人学生

せっかく機会があるのに、日本人学生と留学生との交流が盛んでないことが気がかりですね。付き合っている人は付き合っているだけけれども、ほとんどの学生は顔を合わせても挨拶を交わすこともない。非常にシャイというか、おとなしい方が多いですね。逆に地域の方は、そういうのは関係なくどんどんやりましょう、とやってくれるんですけども。日本人学生はせっかくここにいるのに交流に参加していない。それが残念です。

それぞれのできること・興味を還元できるシステムづくり

最近「フェイスネット・イン新潟」というメーリングリストを始めました。これは





INTERVIEW

阿波村 教授

留学生センター



まず、「国際的なイベントに参加したい。」あるいは「私はこういうことが出来ます。」という人に登録してもらおう。それらを仲介する形で呼びかけを行ったところ、学内ボランティアや地域で行われるイベントに留学生・日本人学生・地域の方が一緒に参加する機会が多くなりました。

最近の成果としては、留学生が他の留学生に生け花を教えたい、というのがありました。中国の人なのですが、日本の生け花をずっとやってきて、「これは素晴らしい。これを何とかして留学生に教えたい。ただどこでどうやったらいいか分からない」と。そこでネット上に「こういうことを希望している人がいます。関心のある人はいませんか。」という情報を流したんです。最初は3、4人でしたが声が上がりました。その後新聞にも取り上げられて、最終的には15人も集まり大盛況でした。他にもいくつか成功した例があります。

もしも留学したくなったら？

これから留学したい人に対しては、留学

生センターで相談にのっていますし、資料もそろえています。留学中の危機管理とかは、私の経験も踏まえて授業の中でも出来るだけ話すことにしています。

留学は自分を見つめ直すいい機会ですし、留学生は地域と大学にとっての宝です。送り出しと受け入れ、そして留学生のケアと交流をどうやってみんなで自然に行っていくかが今後の課題ですね。

インタビューを終えて

「東京三菱銀行パリ支店勤務」という経歴を持つ阿波村先生。そのような人が留学生センターにいらっしゃることにまず驚いた。ご自身が留学を経験なさっているため、留学生に対するケアの大切さを身を持って知ってらっしゃる。留学生にとっては、頼りになる存在だ。そんな阿波村先生に、私たち日本人学生は「おとなしい」と映っているらしい。そういえば私も大学入学当初、ときどきすれ違う留学生にドキドキした憶えがある。髪の色が違う。肌の色が違う。雰囲気が違う……。なんとなく話してみたいけど、やっぱり恥ずかしい。第一どうやって話しかけたらいいんだろう？考えるだけで、なかなか行動に移せなかった。でもこういう学生って、実はけっこういるのではないかと思う（希望的観測）。みんなきっかけが欲しいだけなのかもしれない。そのきっかけ作りに留学生センターが尽力していることを、このインタビューを通じて知った。「みんなの持っている力を還元できれば」という阿波村先生の言葉に非常に共感した。地域も学生も巻き込んで、新大はもっと面白くなるはずだ。私もその力になりたいと思う。

（法学部4年 村越啓子）